

ネイチャー高知

No18 2001年2月4日発行

渚の思い出から

三本 健二

夏の家族旅行の途中、東洋町の白浜海水浴場に寄った。夏休みが始まる前の平日で人出が少なく、夕方になると、広い砂浜に私たちしかいなくなった。2歳の息子は、水遊びと砂遊びのあと、渚を走りまわった。時々ころんでは、顔を砂だらけにして泣いたり、また走ったりと、大はしゃぎだった。その相手をしながら、せっせと貝殻を拾い集めた。写真はその一部で、ほかに美しいサクラガイ類などもあったが、写真には入っていない。

浜に打ち上げられる貝は、だいたい水深10mより浅い所のものといわれる。白浜は遠浅の砂浜で知られていて、拾った貝も砂底にすむものが多い。その一方、カサガイ類のように岩場や礫海岸にすむ貝も少なくない。まわりの岩場から流れてきたものだろう。また、河口の汽水域にすむ貝も混じっている。浜の両端にある川から流れてきたものだろう。このように、浜の貝殻を調べると、そのあたり一帯にどんな貝がすんでいるのか知ることができる。

あちこちの浜で拾ってきて比較してみると、種類構成の違いが出てくるだろう。同じ浜でも季節によって違いがあるだろう。自由研究として手ごろなテーマだと思う。それだけにとどまらず、一定の方法を決めて継続的に行えば、貝類相の変遷、ひいては生態系や環境の変化を知るための資料になる。渚の思い出のきれいな貝殻に、そんな大きな意義が秘められている。



里山林から学校が視えてくる

土佐山田町大平の県森林総合センターには、森づくりや里山林での遊び体験・きのこや木工教室など、さまざまな自然体験のためのボランティアが研修や実習に訪れて、小学生や親子の体験学習をサポートする研鑽を続けています。

インタープリターとして自然解説プログラムを組み、些かですがこどもたちの自然体験やふれあいの実習に関わっていますが、今「総合的な学習の時間」を前倒する形で、近郊の小学校から体験学習要請が次々と寄せられ、連日のようにこどもたちの歓声が、里山にこだますようになりました。多いときは250人を超える日もあり、わずかな職員ではその目的や安全面を考えると、学校側の日程や時間には限界があり、林業体験者や研修中のボランティアが、各分野に参加することによって体験実習の「手助け役」として、活きた研修にも役立っています。

前から少し気になっていたのですが、勉強の場である学校を中心とした教育は、豊富な教科と授業によって飛躍的に学力を向上させてはきましたが人間形成過程の、ことに自然の中でこそ培われる体験的な危険や尊厳、慈愛と苛酷さを身につけるには、自ずと限界があると感じていたものでした。里山林での自然体験学習などは、まさにこどもたちの成長過程に、抜け落ちた時空を埋めるのにこの上ない時間として、こどもたち以上に喜びを感じているのは、外でもなく自分自身だと思っています。

昨年、ある中学校の一学年が150名を超す大人数で体験学習に来た時のこと、作業手順や各自の装備など安全作業を説明し、担当者の案内でこどもたちは嬉々として里山に入った。雑木林の「ノコギリ体験」組と、ツリーハウス「屋根づくり」組に分けて作業に掛かったが、再三の手袋ヘルメット着用の指示や注意にも従わない、誰の指示も耳をかさない生徒がいた。地上3メートル以上はあるツリーハウスの、上を見上げている女生徒からは、ヒロイズムを計算に入れた危険な行動が大人気を博し、茶ばつの突っ張りには不釣り合いな色白でニヒルな彼は、先生の声など届きようもありませんでした。

この際、忠告してもダメなら引きずり降ろすしかないかと思いながらも、何か役割の使い方がないかと考え、敢えて屋根づくりの危険な作業をさせることにして、矢継ぎ早に指示を飛ばしてみました。しかし彼はそれに怯むどころか、見事に作業をこなしたのです。

昼の休憩時間が迫り彼を見守る同僚や担任も、その意外な活躍ぶりに感心し、担当者が「このツリーハウスは、真也君のツリーハウスと命名します」と功績を讃えると、茶ばつの突っ張りに似合わず、照れ隠しに頭を埋める彼に、ひととき大きな拍手と歓声が上がりました。

9月とは言え暑い日盛りの昼食のあと、作業は午前の組と替わり全行程はこと無く終了し、全員集合しての点検と閉会時間に引率担任の「出発時の約束に違反したと思う者は、今すぐ立て！」との命令にいささかびっくりしながら、しゃがみこむこどもの中からムックと立ち上がったトップに、真也君がいたのには仰天しました。その過は、暑さの中で喉の渇きに勝てず自販機からジュースを買って飲んだと言うものでした。違反者の少なさにやり直す場面でも、やはり真也君は、悪怖れもなくさっと立っていました。引率教師の言動には、不慣れにも耐えてやり遂げた、こどもたちの健気さを讃える心は微塵もなく、相変わらず教室の中で生徒を管理する思想、と言う現状だけが目の前に晒されていました。バスに乗り込んだ彼らは、車に向かって振るわたしたちの手にも反応はなく、帰路に着いたのです。こどもたちが何のために一日を費やして里山林にやってきたのか、気持ちを

考えると淋しく、そして寒気すら感じてしまったものでした。ただ一つ救いだったのは、真也君がわたしたちにはっきりと「ありがとうございました」と、あいさつを忘れなかったことでした。

突っ張りや目立ちたがり屋、見かけなどではなく、教室や学校という器には、馴染めない子どもたちでも、森や里山の自然の中にこそ待っていたように、素的な芽を出し能力が発揮できる子どもたちがいることを、もっともっとよく知ってほしい。彼らが持っている感性や官能が誰からも邪魔されず披瀝され、他の者からそれが認められた時、彼の居場所としての心の安寧が確立されて、初めて自らを取り戻すことができるのだと感じました。

子どもたちを学校や授業の中だけで管理したり評価するだけでなく、今一度見直すチャンスとして欲しいものです。まさに里山林の体験や自然のふれあいは人間形成途上のあらゆる場面で、彼らのやさしさや個性の芽生えを少しでも早く見出だして、評価をみんなのものにすることが大切であり、本来の願いではないかと気づかされました。

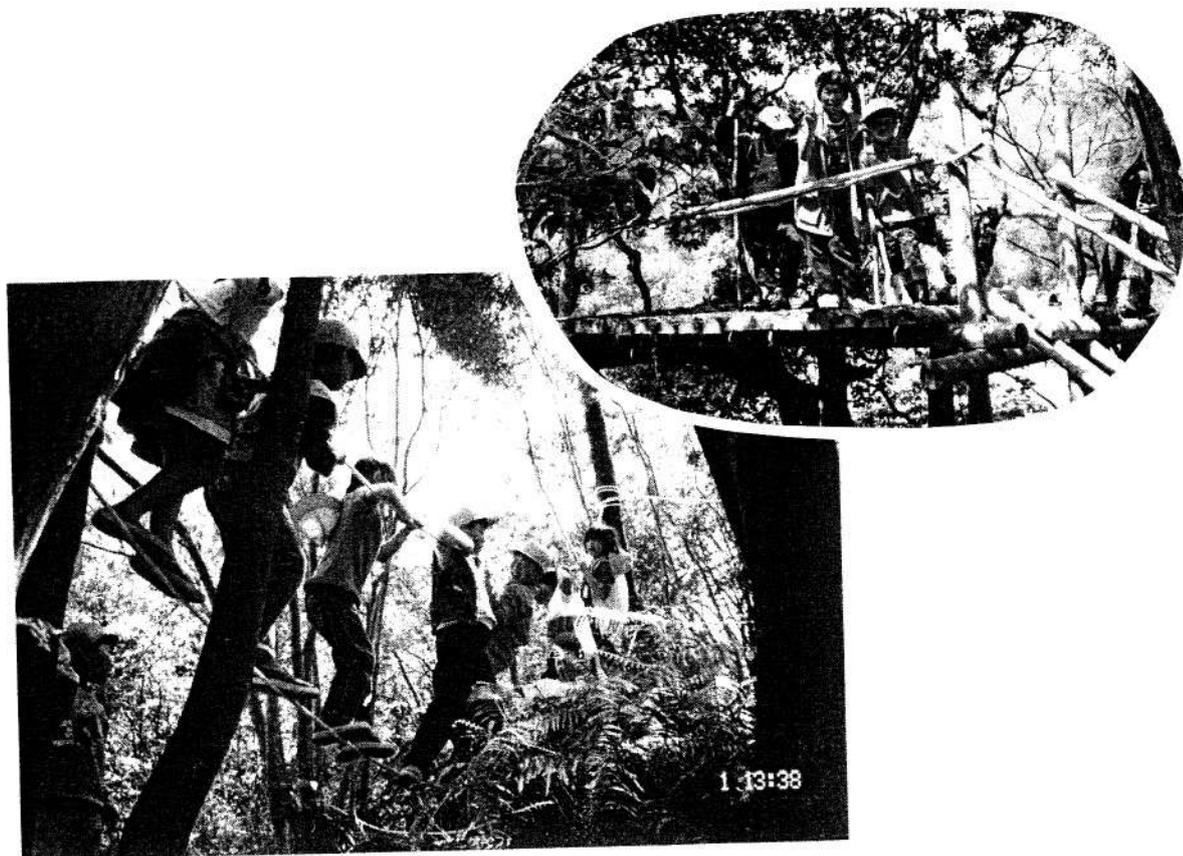
有能な彼らの萌芽を遺憾無く、太陽の輝きの中に呼び出すことこそ、真の教育ではないのかなと思いました。

いち日の里山林での体験が、表現できない多くの成果や教訓に巡り合うことができ、子どもの姿や学校が視えてくるのでした。明日も自然の中で、子どもたちとふれあうことによって多くのことを感じ、多くのことを学び、多くの元気をもらいます。

以上

2001年1月15日

イタ-リタ- 浜 氏 拡



静かな闘争心

私が初めて三嶺に登ったのは1971年5月1日のことだからもう30年近くも昔になる。それ以来、三嶺をホームグラウンドとして、山登りを楽しんできた。その当時の多くの若い登山者が歩んだように、岩登りや沢登りにも少しばかり手を染め、北アルプスなどの日本を代表する山にも登ってもみたが、やはり四国の藪山、その中でも三嶺が最も落ち着ける山であった。

その三嶺を巡ってこの30年間で最も論争を呼んだのが、1975年に起こった「自然休養林指定問題」だった。当時は国有林もそれまでの林業経営だけの視点から森林を見るのではなく、森林の多様な機能を国民に開放しようとしていたのかもしれない。しかしながら、考えは新しかったかもしれないが、する事は自然林を伐採したり、林道をつけたりで、昔とそう変わったことではなかった。三嶺でも、白髪山北西斜面の自然林を伐採したり、さおりが原まで林道を延長しそこに駐車場を作るといってもない計画であった。これに対して「三嶺を守る会」を結成し、その保全に取り組んできたが、それは三嶺をホームグラウンドとする者として当然の成り行きだったと思う。

三嶺を守る会が結成されたのは1975年（昭和50年）12月のことである。そのときの三嶺を守る会の結成アピールが今も手元にある。このアピールをまとめた時、守る会の主だったメンバーは皆20代半ばで、あまり周りのことは気にせず、三嶺に対する自分たちの思いの丈をぶつけたような文章になっている。紙面をとって申し訳ないが少し紹介させていただく。

三嶺を守る会結成アピール

自然をただ利潤追求の対象、あるいはただ単に、ながめるだけの対象として考える思想の波に乗って、山々により高く、より奥深く、経済破壊、自然破壊が進み、林道が網目模様を描き始めた時、人間は自然と相対し、自然を支配し、収奪しようとする事の無謀さ、傲慢さを思い知らされ、大自然のほんの一部としてしか生き得ない自分に気づき始めた。都会の人々が、自らの足下の自然を破壊し、緑に飢えねばならなくなった論理をたずさえたまま、ただ、飢えを満たしに山奥へ押しかけるならば、山奥の自然も、山村も、確実に破壊されていくだろうし、又、都会にも自然は戻らないだろう。今必要なのは、山を歩き、自然とのつきあい方を肌でつかみ、それを都会へ降ろしていくような自然の求め方ではないだろうか。

今また、同じような前時代的パターンで、四国最後の山三嶺がじわじわと破壊されつつある。

山は、登山者のものでないという偏見と、山の経済開発至上主義とによって、両雄石鎚山、剣山をはじめ、四国の主なる山々が車道に蹂躪され、破壊される

中で三嶺一帯は四国に残された最後の山岳地帯である。

もはやこれ以上の破壊は許すまい！

三嶺一帯の山々だけは、自然の原点として残そう！

残さねばならない！

＝村の人たちへ＝

村の生命、美しい自然を汚し、壊す“身売り”代償としての村の発展(?)を願わず、美しい自然を守り生かすことにより、村の活路を見いだそう。

＝営林局の人々へ＝

国有林は、営林局の私物でなく、国民の財産である事を深く認識し、山をただ経済的にしか見ない体質を改めて欲しい。

＝観光する人々へ＝

車を降り、歩いて山に親しもう。

＝登山する人々へ＝

登山する心を育んでくれた三嶺に感謝し、三嶺の美しさを積極的に守っていこう。

＝そして、全ての人間と呼ばれる人々へ＝

もはや、自然を人間につき従わせようとする傲慢さを捨てよう。人間は自然の一部として、自然に保護され、生かされているのだという認識を深めていこう。

三嶺を守る運動を、その出発点として・・・・・・

ここに「三嶺を守る会」を結成する。

1975年12月20日

あれから25年たった。今度は徳島側でロープウェイ問題が起こっている。すでに新聞報道などご承知の方も多いと思うが、三嶺頂上の北にある東祖谷山村菅生から三嶺の中腹までロープウェイを建設し、その終点近くに観賞植物園を作ろうという計画である。菅生にある青少年旅行村を観光拠点としてリニューアルし、三嶺をてこに地域の振興をはかろうとする、いかにも20世紀的な発想ではないか。25年前に私たちが三嶺を守ろうと発表した結成アピールのうち、当時の計画の当事者だった「営林局」を、今回事業を行おうとしている「東祖谷山村」に置き換えれば、25年前の主張がそのまま当てはまる状況である。

私たちは20世紀の終わり近くになって、20世紀に行った自然を犠牲にした開発は成り立たないことに気がつき、自然や環境と調和し持続ある発展を目指すという新しい道を見出したと思っていた。が、まだまだそうでない人が、しかもそれが自治体のリーダーにいることに驚き、そのような無謀な計画に対して昔ほど熱くはないが、静かな闘争心が沸いてきた。

坂本 彰

高知県自然観察指導員連絡会総会資料

日時 2001年2月4日(日) 午後1時30分から
場所 高知県立牧野植物園
牧野富太郎記念館アトリエ実習室

2000年度事業報告

活動の概要

自然観察会は、高知市を中心に植物やムササビ、干潟の生物などの観察会を7回開催しました。また、大月町柏島で進められている「黒潮実感センター」の取り組みに協力して、陸上の植物や鳥などの調査・観察に有志が参加しました。課題としては、夏期(6月から8月)の観察会が開催できなかったこと、講師が限定されていて「どこでもだれでも自然観察」という状況にないことがあります。また機関紙、ニュースレターについては隔月の発行を目指しましたが、11月のニュースレターの発行ができず、また、機関紙「ネイチャー高知 NO18」の発行が遅れました。

2000年の活動

- | | |
|---------------|--|
| 1月23日 | 定期総会兼研修会
「高知県の野生植物の現状と保全の課題」 講師 鴻上泰
機関誌「ネイチャー高知 NO16 発行」 |
| 2月 5日 | 春の七草観察会 高知市久礼野 |
| 3月10日 | ニュースレター NO8 発行 |
| 3月25日 | スマレ観察会 高知市鏡村 |
| 4月 9日 | 干潟の生物観察会 高知市中之島弘化台 |
| 5月10日 | ニュースレター NO9 発行 |
| 5月20日 | ムササビウオッチング 伊野町杉本神社 |
| 7月23日 | 機関誌「ネイチャー高知」NO17 発行 |
| 9月 3日 | キノコ観察会 越知町横倉山 |
| 9月20日 | ニュースレター NO10 発行 |
| 10月 7日 | 秋の七草と棚田の植物観察会 高知市久礼野 |
| 11月 8日 | 蛇紋岩地の植物観察会 高知市蓮台 |
| 11月12日 | ヤッコソウとオオキンカメムシの観察会
ヤブツバキ保全活動 土佐清水市足摺岬 |
| 12月 2日
～3日 | 大月町柏島調査 |
| 12月 | 四国森林管理局との意見交換 |

2001年度事業計画

自然観察会の開催

春の七草やスマイレの観察会など四季折々にふさわしい観察会を定期的に行います。

観察会のテーマを植物以外にも広げていきます。

安芸市や幡多地域でも、地域の他の団体と協力して観察会の開催に取り組めます。

保全活動等

県下各地で行われる里山などの自然保全活動に積極的に取り組んでいきます。

機関紙・ニュースレターの発行

会の取り組みや催し物の情報を会員に伝えるため、機関紙・ニュースレターを各月に発行します。

その他の取り組み

9月に上映される予定の「センス・オブ・ワンダー」の上映実行委員会に参加し、上映の成功に向けて取り組みます。

行事予定

1月27日	春の七草観察会	高知市久礼野
2月4日	定期総会兼研修会	
	「柏島の魅力と黒潮実感センターについて	
	講師 神田優（黒潮実感センター設立準備委員会）	
	機関紙「ネイチャー高知」NO18 発行	
3月	ニュースレター	発行
3月	スマイレ観察会	高知市鏡村
4月	干潟の生物観察会	高知市中之島弘化台
5月	ニュースレター	発行
5月	ムササビウォッチング	
7月	機関誌「ネイチャー高知」	発行
8月	会員研修会	
9月	キノコ観察会	越知町横倉山
9月	ニュースレター	発行
10月	秋の七草と棚田の植物観察会	
11月	蛇紋岩地の植物観察会	
	ニュースレター	発行

高知県自然観察指導員連絡会
2000(平成12)年決算報告書

歳 費	予算	決算	内容
歳入			
繰越金	¥95,650	¥95,650	
会費	¥85,000	¥72,000	前年以前分10, 当年分59, 翌年以降分2
利息	¥300	¥106	税引額
合計	¥180,950	¥167,756	
歳出			
通信費	¥86,000	¥41,780	機関誌送付、観察会案内、総会案内
使用料	¥10,000	¥5,400	
講師謝金	¥20,000	¥0	
印刷費	¥36,000	¥12,737	機関誌、総会資料
事務雑費	¥20,000	¥5,392	封筒購入
予備費	¥8,950	¥0	
合計	¥180,950	¥65,309	
差引決算額		¥102,447	

2001(平成13)年予算案

歳 費	予算	内容
歳入		
繰越金	¥102,447	平成12年会費2名含
会費	¥85,000	当年分80、前年分5
利息	¥200	
合計	¥187,647	
歳出		
通信費	¥86,000	会報@130 * 2回 * 90・Nレター@80 * 4回 * 90 行事@50 * 4回 * 90・総会@(80+50) * 90 役員連絡@80 * 4回 * 12
使用料	¥10,000	会場借り上げ@5000 * 2回
講師謝金	¥30,000	外部講師2名分
印刷費	¥36,000	(会報P10 * 2回 + NレターP2 * 4回) * @10, 5 * 90 総会資料P10 * @10. 5 * 90
事務雑費	¥20,000	封筒・事務用品
予備費	¥5,647	
合計	¥187,647	

観 察 会 の 報 告 その 1

秋の七草と棚田の植物観察会

10月7日土曜日午後1時30分から、高知市久礼野の稲の取り入れの終わった棚田の周辺で「秋の七草と棚田の植物」の観察会を行いました。

参加者は20名、いつもの事ながら久礼野の自然は素晴らしく、昨年観察できたミズオバコは残念ながら見かけることができませんでしたが、オミナエシやシモバシラ、キバナアキギリ、サクラタデなど田んぼや周辺の草地に咲くたくさんの秋の花々を観察しました。講師は細川公子さんが務めました。

参加者から寄せられた感想

教えていただいた草花の種類は98種にもなりました。これから少しずつ記憶の中に入れていきます。

どうもありがとうございました。

知的でゼいたくな時間を過ごさせていただき、ありがとうございました。帰ったら図鑑を見ながらじっくりと復習させていただきます。

南国市 伊東祐道 伊東容子

野の花の観察会ありがとうございました。滋味あふれ、心が豊かになる思い出です。トンボがいないのが残念でした。

高知市 池川 由子

はじめての植物観察に参加させてもらって、今まで見逃していた草花の名も解り楽しい葉日でした。

高知市 浜崎欣子

いつもは何となく見過ごしていた野草もゆっくり見せてもらいました。

高知市 清谷 悦民

見たことのない、新しく知った植物がとても多く、楽しい半日でした。ありがとうございました。

高知市 合田 十子

観 察 会 の 報 告 その 2

蛇紋岩地の植物観察会

土佐山田町油石から高知市逢坂峠・円行寺・蓮台さらに日高村の柱谷・錦山に連なる地帯には蛇紋岩地が連なっており、そこには蛇紋岩地植物といわれる独特の植物群が生育しています。

その中で、高知市蓮台から円行寺の西に至る地域は手軽に蛇紋岩地植物を観察できる地域です。

秋の色濃い11月18日土曜日の午後、この蓮台から円行寺にかけての地域で観察会を開催しました。参加者は31名、細川公子さんが講師を務めると晴れるというジンクスのとおり絶好の秋日和に恵まれ、ムラサキセンブリやヤマラッキョウ、ツリガネニンジンなどの晩秋の野の花を満喫しました。

参加者から寄せられた感想

久しぶりの青空の下、気持ちの良い山歩きでした。はじめての蓮台、とてもすてきでした。

高知市にこんなにもひっそりとした場所があるなんて・・・

枯れはじめているフィールドの中、ヤマラッキョウやムラサキセンブリの紫がとても印象的でした。Thanks!

高知市 橋本 裕子

いつもありがとうございます。自然の花には魅せられます。里山の景観と風、空気も全部楽しませていただきました。

次回もよろしく。

高知市 福永 清子

今回は原稿の集まりが悪く、作成に苦労しました。年2回の機関紙ですので皆様の積極的な投稿をお願いいたします。次の第19号は7月に発行の予定です。

今から準備され、にぎやかな紙面になるようご協力をお願いいたします。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報 No18

事務局 高知市朝倉南町 3-51-1 坂本彰方

TEL&FAX 088-850-0102

E-MAIL akira@baobab.or.jp